

京都市はぐくみプラン〈2025-2029〉

(京都市子ども・若者総合計画)

の策定に当たって

京都市長 松井 孝治



明治維新による急激な人口減少で、都市存亡の危機に直面した京都の先人たちは、「まちづくりは人づくりから」と、自ら資金を出し合って日本初の学区制小学校である番組小学校を創設しました。この創設に、町衆たち自身も主役であるという、教育だけではなく公の執行機能というものを、地域の中で、その人々が担うという気概・思いがあったと考えています。そんな「はぐくみ文化」につながる自治の精神が今なお受け継がれていることは、京都の大きな誇りです。

市長就任以来、「市民対話会議」を開催し、様々な立場の皆様と直接、対話するとともに、時間の許す限り京都のまちを歩き、京都に暮らし、働く方々との出会いを通じて、まちのあり様を私なりに見つめ直してきました。

京都の特性とも言える「まち柄」を確認する中で見えてきたのは、京都の課題と大きな可能性です。

地域コミュニティや文化、伝統など、京都を支えてくださっている担い手の減少や、若者等の市外流出等、子ども・若者や子育て当事者を取り巻くまちの課題を改めて認識しました。

一方で、「はぐくみネットワーク」や学校運営協議会を中心として、子どもを社会の宝として大切にはぐくむ子育て支援など、京都に受け継がれてきた「はぐくみ文化」の伝統と心意気がしっかりと息づいていることに大きな可能性を感じています。

この大切に培われてきた文化を、どのように未来につなげていくのかを、あらゆる垣根を低くして、多彩な人々がつながって実践していくことが重要です。

本プランの策定過程では、私自身も当事者である子どもや若者と意見を交わし、議論を重ねてきました。そうした中で、コロナ禍などで失われた人と人のつながりや、誰もが個性を生かして活躍できる「居場所」と「出番」の大切さを改めて実感したところです。

安心して子育てができる、妊娠前から子ども・若者までの切れ目ない支援はもとより、子ども・若者や子育て当事者・子育て支援者の皆様が、公の担い手であり、その思いや意見を地域や社会に反映する「結節点」となりうるという考えや、その構築とあり方を考えていくことが重要です。

本市としても、地域、学校、企業、団体などあらゆる主体との連携を深め、誰もが幸せを感じ、互いにつながり、支え合い、生きがいを持って活躍できる地域ぐるみ、社会ぐるみの「こどもまんなか」のまち京都を実現してまいります。

変わらぬ御支援と御協力をお願い申し上げます。